

子どもの育ちに関する実践的研究

保育の中での「ゆれ」について

永倉みゆき

一、はじめに

園での子どもたちの生活を見てみると、生き生きと遊び込んでいるような時の合い間合い間に、ふと遊びの流れが滞ったり、散漫になったように見えたりする時間があるように思う。この時間の中で、子どもは迷ったり、探したり、立ち止まって考えたりしているのではないだろうか。これを私は、次の行動に移るまでの「ゆれる」時間であると捉え、考察した。これから、いくつかの記録を挙げて、その「ゆれる姿」を追ってみようと思

う。

尚、これらの記録はすべて、静岡大学教育学部附属幼稚園平成元年度年長組のもので、私は参加観察という形で保育に関わっていた。

二、子どもの「ゆれ」

△記録一▽

Y助、八時五十五分の登園。しゃべりながら朝のしたくの後、K太と二人で年中児に混じって闘いごっこ。二、三回

キックやパンチをした後に抜けて、遊戯室へ。しばらくぶらぶらし、再び年中児の部屋へ行くが、その遊びをちらっと見て遊戯室へ戻る。そこでM男と出会い、顔を寄せて相談。

「外へ行こうかなあ。」等。部屋を通り抜けて外へ向かう途中、参観できていた母数人に、「Yくん、(紙で)スバゲティー作ってくれない。」と頼まれる。Y助「なんで……。」とはじめは仕方なく作っているが、そのうち自分なりに工夫し始め、熱中していく。

ここでY助は、登園してから部屋にすわって何かを作り始めるまでの十数分の間に、年中児の部屋、遊戯室、年長児の部屋と、めまぐるしく行き来する。また、彼はこの他にも記録に挙げきれないほど、きょろきょろ眺めたり、出会った子にすれ違いざまちょっとかいを出したりしていた。まるでその姿は、何か面白いことはないかと様々なことを試しているようであり、そこには「目にとまったものごとには手を出してやってみる」というY助の個性があふれていた。このようにして、熱中して遊び

こむまでの時間に、彼は自分なりのやり方で、あれこれ試して面白いことを探っていたのである。

次の記録二、三は、彼がもめごとを起こした時のものである。

△記録二▽

Y助、遊戯室でボールを見つけ、K太、M男らとサッカーのようにけり合い始める。ところが、そのボールはT男が使っていたものなので、T男がY助に文句を言う。Y助、怒ってT男をたたく。T男が悔しそうに涙をこらえてじっと立っていると、周りの子が「どうしたの。」と寄ってくる。Y助は、その事に気付かぬように明るい調子で冗談を言うが、皆、困った表情で笑わない。一人二人とつまらなそうにその場を去って行き、遊びは消えてしまう。

△記録三▽

Y助とS子が、自転車を取り合う。Y助は、自転車にまたがると後ろからひっぱっているS子をたたき、なおも掴む手を振り切って走り去る。が、園庭を一周回っていると、「いいよー。のっても。」とS子に譲り、自分は他の自転車を探す。

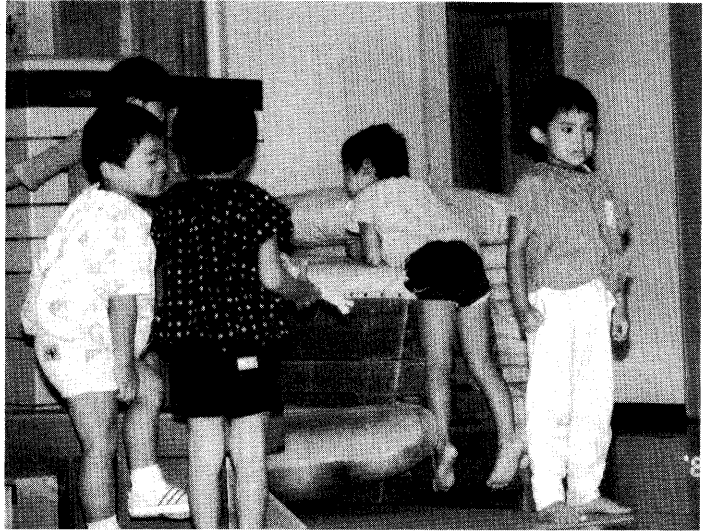


写真1 丁男とのいさかい
Y助は一番左

二、三いざれでもY助は、謝る、譲るなどして相手の気持ちにこたえることはできなかった。しかし、正に彼が何もできないでいた時間——これを私は「ゆれ」といふと捉えるのだが——の中にも彼の迷いがよく表れていたと言える。つまり記録二においては、T男が泣きそうになってしまったことで、他の子がうきうきした気分をなくしてしまったので、Y助はひとり冗談を言っただけでその場の雰囲気を変えようとする。この時、やけに明るく振舞うY助の姿からは、内心の慌てぶりが伝わってくるようだった。(写真1) 結局彼はT男に対しては、何もできずじまいだったが、この気まずく澱んだような気分を十分味わったということが、何よりもY助に「まずいことをした自分」「T男に対して何をすればいいのかわからない。或いは、わかっていてもできない自分」を感じ取らせたものとも言える。記録三では、二と違い結果として相手S子の気持ちにこたえることになるが、ここで注目したいのは、彼が自分から自転車を譲ろうとするまでに、園庭を一周してくるだけの時間、則ちその間の

心の動きが必要だったということである。いずれの場面でも、迷い、ゆれる姿には、彼が今いる成長の段階——頭ではわかっている、すぐには行動に出せない——が、そのまま表れている。「ゆれる」ことはつまり、今の自分を生きることなのである。

△記録四▽

園庭で、保育者が数人の子と遊んでいる。E子は戸口からそれをじっと見ている。(写真2)時々部屋の工作台上、折り紙を折りに行くが、外から賑やかな声が聞こえてくるたびに、戸口に戻って外を眺める。四回ほど行きつ戻りつする。保育者が部屋に道具を取りに来て、「ゲームやるよ。」と中にいる子に声をかけると、それらにつられて外へ出かかると、やはり戸口で足を止め、じっと外を見ている。しばらく見つめているが、ようやくゆっくりと靴をはく。(写真3)この間、約四十分。

ここで注目したいのは、E子が外の仲間に入って行けたことではなく、四十分近くも行きつ戻りつした揚げ句



◀ 写真2 じっと外を見るE子



▶ 写真3 思い切ったように靴をはく

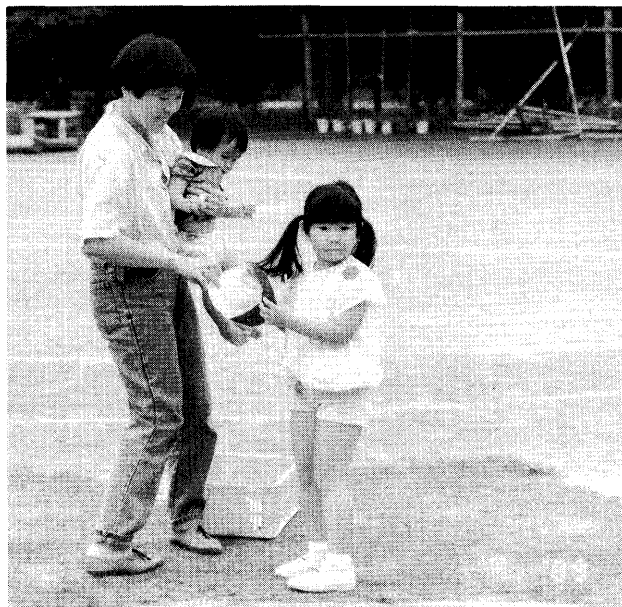
に、自分から出て行ったということである。保育者は、

一度部屋に戻った際に「ゲームやるよー。」と声をかけたが、それ以上強く誘うことはせず、E子の選択に任せている。ここでもうひと押しすればE子について行ったかもしれないが、そうしないことを選んだことで、E子の中の迷いが更に十分ほど長びくことになった。E子が外の仲間に加わる事のみを目的としてしまえば彼女は十分近くも時間を無駄に費したことになるが、決してそうではない。彼女は戸口と工作台を行ったり来たりする中で、外へすつと出て行くのを阻む、心の中の何かとの間で葛藤を繰り返していたに違いない。

外に出て、こちらを振り返ったE子の顔が、きつぱりと晴れやかだった(写真4)のは、長い「ゆれ」の末に、何かを自力で乗り越えたからであろう。

以上、記録一、二、三、四にあるように、子どもは、その子なりに悩み、試行錯誤する中で、ありのままの自分を表出し、またそれを感じ取っていく。言いかえれば「ゆれる」ことは、自分を確かにしていくことであり、

写真4 振り返った顔は晴れやかに



結果として何かを乗り越えることだけではなく、「ゆれる」ことそれ自体が意味あることだと言えよう。そして、納得がいくまでゆれた後に、子ども自身が何かを判断する時、今その子が置かれている状況、と同時にその子の抱えている自分の中の壁も、切り拓かれていくのだと考える。ランゲフェルドによれば、何か課題的狀況にぶつかった時「子どもは子どもなりの仕方では傾聴に値する根拠を見出して」いくものであり、「子どもの発達は……発見の過程と、創造的な過程を辿るものであり、この過程の中で子どもは突如として問題の解決を見出していく」(※1)のだと言う。保育の中で、子どもに、考へ、探り、試し、迷う時間、則ち「ゆれる時」を多く与えるということは、この発見の過程を辿る機会を多く与えることに通じるのではないだろうか。

三、ゆれを支える保育者

それでは、ゆれている子どもを保育者はどのように支えていけばよいのだろうか。保育を、子どもに対してあ

る目標を持ち、それに向けて援助するという一方的な関係でなく、「相互的にたのしみながら押し引いたりしている間に変化してゆく相互的な過程」(※2)と捉えるならば、保育者は、子どもが自らの生き方を模索し、創造する過程に生まれる「ゆれ」を、励ましたり、促したりするのではなく、そのままの状態を支えることになるだろう。つまり、「この状態から抜け出させてあげるのには、どうしたらいいのか」と考えるのではなく、*「今のこの子の姿は、一体何を表しているのか」と、表れているものの真の意味を問いつつ見守り続けていくのである。*

しかし、そのためには、相手がどんな姿を見せても、それを受け入れる構えが必要であり、この相手を受容するということとは、たやすくできることではない。なにしろ、相手は新鮮な感覚や体を持ち、日常に慣れきった大人たちに常に問題をつきつけてくる存在だからである。これらをすべて認め、受け入れることは大人である保育者にとって容易なことではない。時には、互いの考えや



行動が葛藤し合い、大人たちの世界の常識が覆されてしまふことも起こってくる。保育者にも保育者の個性があり、価値観がある以上、それらを即座に無にして子どもに向かうことは難しい。当然そこには保育者自身の迷いが生じてくる。ゆれる子どもと真剣に相対し、支えていこうとすることで、保育者自身も自分のものの見方の洗い直しを迫られるのである。つまり、そういう子どもを

受け入れようとすることは、同時に、自分自身に対して
も「受け入れる自分」を認めることであり、保育者自身
も、戸惑いゆれる。時には、子どもを受け入れようとし
ることで、保育者自身の価値観が根底からゆさぶられて
しまうことも有り得る。それはもはや、子どもに対して
の疑問というだけではなく、自分自身の価値観、人生観
に対する問いかけである。

このように、保育者自らも、ゆれまどいながら不安定
を演じつつ、ゆれる子どもを支えていこうとする時、言
いかえれば、保育者自身の生き方がゆり動かされてもな
おかつ子どもを信頼してみようとする時、保育者の方
にも思いがけず新しい世界が開けてくる。

それはつまり、大人としての常識や判断をいったん忘
れ去り、そのひとときを子どもに委ねたことで、そこに
私達大人の価値観（経験の上に築かれた）とは違う、
もつと原初的なものによって支配される世界が生じ、そ
こに保育者自身もが入り込んでしまった、ということ
あり、子どもの「ゆれ」を自分の中に受け入れること

で、保育者の眼もまた常識的なものの見方から解放され
たのである。

四、むすび

以上のように考えると、正にこの「子どもの心の「ゆ
れ」を保育者が自分自身の生き方をも問い直しつつ受け
入れ、共に担っていく」とする行為が、こそが保育である
とは言えないだろうか。今後は更に、子どもと保育者が
共にゆれつつ新たな世界を共有していく過程について考
えたいと思う。

※1 M・J・ランゲフェルド 岡田渥美・和田修二監訳『教
育と人間の省察』玉川大学出版 一九七四 P 40、41

※2 津守真『保育の一日とその周辺』フレーベル館 一九八
九 P 60

（静岡大学教育学部附属幼稚園）